CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

足助のまちづくりと市町村合併

青木　信行
（足助町企画課長）

1. 人間には耕す文化が必要

節分の時期になると大雪が降るというのは定説で、今年もそんな時期がやってまいりました。足助は、積雪量は多くなく、高いところでだいたい 20cm くらい、平地で 9cm。今日くらいの陽があると、ほとんど雪は溶けてしまうという所です。私が子どもの頃は 40cm～50cm くらい雪があったんじゃないかと思います。いかに地球がいじめられてきたかがよくわかります。

また気になるのが、かつては矢作川の水がもっと滔々と流れていたということです。それが、最近は本当に少ない。これも、地球をいじめた裏返しが来ているのかなと思います。そんなことにようやく日本人が気付き始めて、近くで愛知万博が間もなく開幕します。昨今いろいろな形で、自然と人間がどう向き合っていくかということを考え始めている。最近、そんな思いがしています。

木村尚三郎先生が、「人間は耕す気持ちを失ってはいけない」と、ある書物に書いていたのが非常に記憶に残っています。人間には土や自然とうまくやっていく、耕す文化が必要なんだと思っています。

また、これからは行政と大学が連携を取っていく必要があるとつくづく感じております。行政の中には新しい人づくり、文化づくりというのが欠ける面があります。学問の領域も、人と交わっていけるようなものを教え込んでいく形での勉強をお願いしたい。今日はいい機会を設けていただきました。行政マンとして個人として、非常に嬉しく思っております。

今日は、足助の今までやってきたまちづくり、それからいよいよ 4 月 1 日から豊田市に足助地域が入っていきます。そんなことを踏まえてお話ができれば、と思っています。

2. 伝統と歴史を忘れないまちづくり

足助町は歴史ある町で、景気のいいときには足助の町の中に芸者さんが 60 人ぐらいいたと聞いています。当時は木材の価値が非常にありましたから、皆さん、材木を 1 本切っては足助の町中に出てきて芸者さんと一週間騒いだという話を聞かされています。そんな時代が足助の歴史の中にはあります。

また飯田街道によって、信州方面と尾張・遠州とは非常に交易がありました。その結び役の町が足助でした。三河湾で採れた塩が矢作川を船で上がってきて、豊田市で荷車に積まれて足助の町にやってきた。そして、信州の方に塩を送るために、活躍したのが馬でした。足助の町には年間数千頭の馬が往来していたといいます。その名残は街道にある馬頭観音で、町中に数多く残っています。

そういう街道に位置し、かつては宿場町として賑わいました。いろいろなものがたくさん入って来ますし、いろいろな人たちがたくさんやって来ます。ですから足助の人たちは、山間部でありながら、意外と保守的じゃないんです。ただ、最初はじっと考えます。そして、いったん乗り出すと、ものすごい勢いでパワーを発揮します。やはり、かつての歴史

が人の血の中に流れているのかなと思っています。

そうした町ゆえに、私どもが進めてきたまちづくり全ての根底には、伝統と歴史は忘れてはならないという原点があります。周りが景気いい時に、足助も景気よくついて行ってはいけない。今ここでやらなければならないことは何かをしっかり見極める―。

今、スローフードとかスロー社会とか言われていますが、私どもはもう30年程前からそれを実践しています。今の時代になって、足助の町の方向性は良かった、またその時代が戻ってきてくれたなと、非常に嬉しく思っています。人間というのは、自然、大地、そういうものを絶対欠かしてはならないと考えています。そして歴史を大切にしていくことが大切です。

そういう中で、足助は20年30年まちづくりをしてきました。ただ、「住民参加」というのがまだよくわかっていませんでしたので、しばらくは行政が主体となって町を動かしてきました。それで、ややもすると、住民の声がないじゃないかとか、役所が勝手にやっているじゃないかという声も確かにありました。しかし私は、それは間違っていなかったと思っています。

全て物事を安直に捉えていたら、基盤をつくる大事な時にその礎ができなかっただろう。そこはやはりそこに住む行政のプロにお任せいただいて、行政主導という形で骨格となる基盤づくりをやらせていただいた。幸いにして、私たちの大先輩の方々には、そうした町の骨格を作るビジョン、理念を持った方たちがたくさんおみえになった。私たちは、それをいかに継承していくかという形できたわけです。

3. すべて物語でつながっている町の施設

足助の一番の財産は香嵐渓です。観光客は、年間推計120万人くらいが妥当な数字かと思います。あるところでは200万人という話も聞きましたが、ちょっとそれは多すぎるなと(笑)。そのうちの5割強が11月におみえになる。非常に特異な体質を持った町です。

香嵐渓という歴史的な資産。これは、約400年程前に、そのなかにある香積寺という禅寺の三栄和尚さんがモミジを植えたことが元祖になっています。その意思を継いで、大正から昭和にかけて、町民の皆さんが飯盛山のスギ、ヒノキを伐採して、モミジを移植した。当時、一本木を切れば一週間芸者さんと遊べる時代です。そんな時になぜ木を切って、金にならない桜やモミジを植えたのか。その心は、まだ今でも私の気持ちの中では解明できません。しかし、そういう先人の先を見通した見識が、有形無形に足助の地を全国的に情報発信せしめたわけです。

以来ずっと、足助の町は歴史の延長線のなかで未来の見通しをしながら、まちづくりをしてきました。三州足助屋敷、福祉センター百年草、それから足助城という戦国時代の山城の復元・・・。それらもただ単にやったのではなく、全てのことに「最初に取り組んだ」ということなんです。三州足助屋敷ができてから、いろいろなところに視察に行くと、似たような施設がたくさんあります。しかし、足助屋敷の考え方を越えた、そしてあれほど感動させる施設は他にはない。なぜないのか。手前味噌で恐縮ですが、足助の素晴らしさはそこにあるんです。

あの時期に、あのタイミングで、あの建築工法で、ああいう人の使い方で、展示をして人に教え込んでいくという方法の素晴らしさ

は他の施設にはありません。ただ物見遊山的に観ていますと—ある観光会社の人に聞きますと、「どうも映画のオープンセットに見えてしょうがない」と言う人もたまにありますが（笑）。

足助屋敷をつくり出した、アイデアはどこにあるかというと、先ほど申しました、香嵐渓という自然資産をつくったその気持ちなんです。それがそのまま足助屋敷に再現されている。福祉センター百年草もその延長線上にあります。私どものつくった施設は物語で全部つながっています。その時々の奇をてらってつくった施設ではありません。ある程度の税金を投入させていただいて、行政主体でつくってきたわけですが、そういう意味では、町民の皆さんにきちんとした説明ができると私は思います。

4. 福祉センターに元気老人のかたまりを作る

福祉センター百年草は、私も 2 年間行かせていただきました。あの施設は全国的に言ういわゆる福祉センターとはちょっと違った施設を目指そうということで、取り組んでいます。福祉センターというと、虚弱なご老人を介護するというイメージですが、足助はまだその当時、99%が元気老人だったんです。そういう人たちを家に閉じ込めておくような施策はいけないということが、三州足助屋敷をつくってわかったんですね。それを実践していこうということで、福祉センターに元気老人のかたまりを作ろうということになった。

元気であれば、多少手足が不自由でもかまわない。みんな同じ目線で同じ施設の中にいる必要がある。ということで、普通の福祉センターは車椅子で入っていく玄関と普通の玄関と違いますね。私どもが視察に行きますと、「視察の方はこちらです」と。それはいけないということで、うちは入り口は一か所。視察に来る人も車椅子の人も一緒。これが本来の人間のあり方だという形です。最近、自動扉にしましたが、かつては引き扉でした。立つと自動的に開くなんて、そんなことはだめだというのです。もう元気がいいから、引っぱっているわけ（笑）。でも最近はバリアフリーとかでうるさくなって、やむなく玄関だけ自動扉にしました。

それと、観光というテーマがありました。福祉と観光をくっつけた時にどういう考え方ができるか。その実験施設として「福祉型観光施設」ということでやっています。行政というのは、どちらかというと税金を一生懸命使います。しかし、運営だとか経営だとか、そういうノウハウがなかなかない。やはりこれからは、行政にも経営力がなければいけないということで、少し経営力を持たせようという形です。

中にハムの工房とパンの工房をつくって、経営をしていく。経営をしていくためには、レストランも必要だとか、いろいろなことを考えまして、最終的にショートステイじゃないですが、足助にはやはり人を迎え入れるホテルだということで、福祉施設にホテルもくっつけて、何とか物にしようじゃないかということになりました。福祉センターには国から若干の補助をいただきましたが、ホテルは補助金が出ませんので、町費を投入しました。

行政がホテルを単独でつくろうとすると、民間の料理旅館が反対する。だから、ショートステイの部屋をつくれば感触が違うんじゃないかという戦略でもっていったんですが、やっぱり料理旅館が反発しまして、約半年、建設が遅れました。最後の条件は、料金はこ

れ以上下げちゃいかんということでした。福祉施設ですから、一泊二食でせいぜい5千円くらいの料金でやろうと思っていたのが、素泊まりで7千円でないといけないということで。フランス料理がありますから、一泊一万円を超えてしまうんですね。でもまあ、そういう条件がついて折り合ってできました。食事はフランス料理だから、町中の旅館とはバッティングしないわけです。

民間の旅館が心配したのは、行政がやると客を取られるということ。でもうちの考えはその逆です。ああいういいものをつくって、たくさんの客が来れば当然、部屋数はありませんから、皆さんのところに泊まっていくんじゃないですか、と。けれど、全然聞き入れませんでしたね。ホテルの建設には2千万円かけました。全部で10部屋ありますが、全室、趣きが違います。当時、「10回来て10回違う部屋に泊まっていただける」と宣伝しました。

福祉センター百年草という器の中には社会福祉協議会があり、シルバー人材センターがあり、これから建物の管理をする役所があり、ホテルがありと、ゴチャゴチャになっていたんですね。私はホテルの建設とオープンと営業、そしてその運営をどう統一していくかという役割で行かせていただきました。

5. 農山村の真心を形にして渡すサービス

運営に関しては、百年草協会という組織を立ち上げまして、営業部門はそれでやり、社会福祉協議会は福祉部門—後には介護保険制度も加わりましたが、シルバー人材センターはどういう役割をするかという組み立てをしました。

1年間は百年草協会の支配人を兼ね、なおかつ施設全体の管理ということで、私の身分は本当に複雑でした。職員を辞めたわけではなくて、役場の職員のままでそこにはりついて、本来は建物の管理だけをやればいいのだけれど、支配人という肩書きをいただいて、それで営業部門を統括したという形です。

ホテルの営業を1年間、この素人がやりました。ホテルのことは全然わかりませんので、大変困りました。ホテルの中に入れなければならない、いろいろ必要なものがたくさんあるんですね。それからベットメイク。わかりません。職員を雇っても玄人さんがくるわけじゃない。それで、名古屋国際ホテルに頼み込んで、2週間、職員を研修に出させてもらいました。そして平成5年1月6日にオープン。お客さんに来ていただけるのかなあと心配していましたが、第一号の方が年のころは67、8歳の人で、感激したことは今でも忘れません。宿泊客第一号ということで、花束と記念品を差し上げました。

そこでは接客業について学びました。ホテルマンになってホテルのフロントに立っておりますと、いろんなお客さんがみえます。お客さんを待たせてはいけない。ウロウロしているお客さんがおみえになります。そういう人に対して、いち早くこちらが反応できるか。そのへんが接客業の一番大切なことです。都会のシティホテルには到底かなわない。山村として売り出せるものは何か—真心しかない。丁寧言葉もいいかもしれないが、方言はどんどん使いなさい。でも、真心だけは渡さなきゃいかんということで。

それを形に表そうと思って私が始めたのは、お客さんに来ていただく全部の部屋に書き物を置くということです。足助には森下紙という昔からの和紙があります。それに墨で自筆で書いて、差し上げました。下手な字でも、

その和紙が記念になる。最初はみんな同じような文体になっていたんですが、やがてこの方は前にも泊まられたな、と文面も変わっていきました。それは今も続けておられるようであります。

あるおばあちゃんから便箋用紙に4、5枚の手紙をいただきました。手が少し不自由で、外に出て行くのが嫌だったけれど、ある日、誘われて、デイサービスで百年草に来て絵を描いた。絵を家に持って帰ったら、お孫さんが非常にほめてくれた。「おばあちゃん、やればできるんじゃないの！」。その一言が感激になっちゃったわけですね。手紙には、「絵を描けて本当に良かった。それがなかったら今の私はない。」と、書いてありました。私は本当に嬉しくて、職員にいただいた手紙を紹介しました。百年草にいた2年間は、公務員という今までやってきた「奉仕してあげる」という立場から、「奉仕させていただきます」という気持ちに変えられた2年間でした。行政に帰るとその体験が生きたわけです。

6. 町の骨格に足助の魂を入れる「住民参加」

これからのまちづくりは、そういう視点でなくてはいけないということを痛感いたしました。今まで、どちらかというと、町民対行政というのは、どうも構えてしまう関係が多過ぎた。それではいけない。そういう気持ちを具現化したのが、平成8年から進めた「地域づくり」という新しい取り組みです。町の骨格は行政が頑張ってやらなければならない。いよいよ骨格ができた。その中に足助の魂、町民の気持ちをどう入れ込んでいくか、という作業です。ようやく住民参加をやっていこうという気持ちになったわけです。

といっても、突然思いついて住民参加に行ったわけじゃありません。その前にはいろいろな模索をしています。下積み10年、物を完成してまあまあいけるというまでにはその次に10年、20年数年経ってようやく足助屋敷も一人前です。百年草もつくるのには下積み10年、できてから10年経ちました。住民参加も、どう問いかけていったらいいのだろうという模索をして10年。平成8年から作業を開始しまして、まもなく10年目を迎えます。ようやく歩み始めたという段階であります。

地域づくりだとか、村づくりだとか、まちおこしだとか、言葉はきれいなんですが、実態は、具現化させるのは非常に難しい。難しいとばかり言っていても仕方ないので、まず地域の中に職員が入って互いに仲良くなりましょうという形がスタートでした。「地域担当職員制度」と言います。足助町の地域を17に分けて、そこへ数名の職員をその地域の担当者という形で貼り付けました。地域の行事があると、土曜日、日曜日、夜も出かけて行って、地域の人たちと一緒に酒を飲みながら話を聞く。最初は苦情を聞くことから始まりました。

ところが、そうやって真剣に話をすると、役場の中の実情が台所状態まで皆さんに理解していただけた。役場が町民にしっかり示していないこともあったんですね。もう一つは職員が、ああ地域の中にこんな人材がいると気づき始めた。そして、今までのどちらかというと行政に陳情するというスタイルが、今、本当になくなった。ことがあれば、「こういうことをやりたいんだけど、どうだや。」と、相談する。そんな関係に今なってきている。そんな基礎をもう10年くらいしっかり固めていけば、住民参加というものが具体的なものとして見えてくるのではないか。

その後に、私どもは理論付けを考える。ですから、今は「住民参加」という理論はありません。実践しかありません。人と人が交わる中で、大事なものが見えてくる。そういうものが総じて、これからの新しい人と自然、地域と人の係わり合いが出てくるんだろうと思っています。

5時15分までの仕事が終わって、7時か7時半に集落に入って、9時、10時までやってくる。当初、職員にもなかなか抵抗がありました。残業手当も十分に出るわけじゃありませんから。しかしやはり集落に入っていくうちに、「時間外」という概念がなくなって、みんなが楽しみを覚えてくる。

7. 行政はビジョンを示さない

私もある地域を担当しました。そこは高齢化率が80%、その本人が亡くなると、一軒が無くなるという集落。非常にロケーションのいいところです。集落の中でいろいろ話をしていると、高齢の方なので、知恵や話題をいろいろ持っているんですね。そういう中から何かいいアイデアがないかなと思ったら、ある人が、かつては御岳講をやっていたと言う。その集落からは御嶽山が見えるんです。そして、石で作った仏さんがフッと村の中にある。昔はそれをずっとお参りするお祭りをやっていた。それを再現しよう話になって、私も参加させてもらいました。

何をやるかというと、まず神さんに供える五平餅を作るという作業から始める。五平餅も何から始めるというと、串作りから始まる。それからタレを作る。ご飯を炊く。そうやって始まって、みんなそれを持って、神様に供える。石仏を順番に巡って、最後に帰ってきて、食事を兼ねた宴会をする。僕は、それでいいと思う。これをやりなさい、あれをやりなさいではなくて、皆さんの話し合いの中からヒントが出てきたということでね。今年も第二段をやると思います。そんな新しい芽生えもあります。

それぞれの集落の持ち味をいかに引き出してあげるかというのが行政の業務。行政はビジョンを示さない。じっくり話し合う。話し合っているうちにアイデアが出てくる。自分たちがやってやろうという声が出てくる。行政がやってくださいというのは続かない。いいところ3年間ですね。3年やるとたいがいのところは終わってしまう。それは本物じゃない。続けていくという力は、本当にすごい。そんなことを唱えながら、職員に負担をかけながら作業して、ようやく職員もまちづくりというのはこうだとわかってきた。そういう模索をしている段階で、市町村合併という話が持ち上がってきたんです。

8. 合併—豊田市を中心に分権された農山村

平成12年頃から国の方で地方分権の話が出てきて、何か動きをしなきゃいけないということで、平成13年に豊田加茂広域圏で研究会を立ち上げた。平成15年11月に法定の合併協議会を設置し、正式に協議を始めた。豊田市との合併協議はスピードが速かった。それは、「合併の方式は編入合併を採用」、「合併の期日は平成17年3月31日までに」、「新市の名称は豊田市とする」、「新市の事務所の位置は、現在の豊田市役所とする」といった合併基本4項目が問題なく了解されたからだと思います。また、この合併がうまくいったのは、豊田市が足助を中心とした山間部を迎え入れることに、非常に好意的であったからだと思っています。

足助はなぜ市町村合併に傾いたか。今まで豊田加茂広域圏の中で、豊田市を中心とした8市町村は本当にいろいろな面でつながりがありました。特に経済関係のつながりは、たまたま「足助」「豊田」という看板があるだけで、本当に一体的だったという、溶け込んでいきやすい土壌がありました。また足助町の将来を見た時、財政的に多分これはだめだろうと。10年は持つが、その先はない、という判断がありました。究極はそこですね。財政が立ち行かなかったら、いくらきれい事を言ってもやれない。今、財政規模が50～55億円。おそらくこれから10年先を見ると、30億円から40億円の予算規模を我慢しないとやっていけない。職員を減らせばいいじゃないかと言うけれど、そう簡単にいかない。税金をどんどん上げていくこともできない。命を育む矢作川流域一体は、これから新しい地域を形成しても、全然間違いではない。水の流れはきちんと流れているということで、政策決定をさせていただいたわけです。

1つの町を経営していくという点からいうと、当然、規模が小さければ小さいほど、確かに目の行き届くことがあります。しかし私は、逆に地域が広がることによって、足助のパワーが出てくるのではないかと思っています。地域が広がることによって、プラス要因がこれからたくさん出てくる。豊田市長さんも「足助が抜けたら合併はできない。」と言われました。言い当てて妙だと思いました。足助の重要性は、豊田市も十分に見ていてくれる。足助がこれからもう1つエネルギーを出していくことによって、市域全体に厚みが出てくる。

今回の合併は、本当に日本の縮図です。しかも、この合併は全国的に例がない。「都市内分権」という発想をこういう地域が出してきたというのも初めてです。合併の地域の将来ビジョンでは、都市と農山村の共生、交流、自立というものを打ち出しています。これを具現化するならば、この合併は将来性がある。都市内分権の中には「地域自治」という言葉が出てきます。地方自治法の中で地方自治区というものを定めておりますが、その中には「地域会議」というものが定められております。まさしく豊田市の中に分権による自治制度ができあがっていくわけです。中央集権でない行政の仕組みがうまく機能できるようにするためには、地域会議というものが、これから大きな役割を果たしていくと思っております。山村の真ん中には足助があります。山村の拠点は足助。豊田市を中心にして分権された山間部という都市内分権構想が魂の入ったものとして運営されていくならば、これは素晴らしいものだし、またそうしていかなければいけないと思います。

豊田自動車を中心とした産業都市・豊田市のまちづくりも、周辺に山村を抱えることによって変わってくると思います。豊田市は都市化しなくてもいい、というのがいつも私の頭にあって。田園都市でいいんです、豊田市は。もっともっと周囲の山間部を取り入れた街をつくっていくのが豊田市の目指す方向ではないのか。それによって、現在は欠けていると言われる文化が出てくる。かつての農山村のたたずまいを残さないような地域は、自分からなくなってしまうのではと思います。農山村があってこそ、地域は成り立っていく。それを絶対に忘れてはいけません。

共生という理念が打ち出された以上、矢作川を中心としたまちづくりを一体となってやる。そのためには、これから足助地域がより

頑張って、今までなかった文化性、足助のまちづくりを豊田市の中に吹き込んでいくという作業を、これから10年20年続けることが、この合併の一番の意味があることではないかと思います。

何事にもタイミングというのがあります。そういう関係が整う時期が今だ。今のこの時が終わったら、未来永劫そういうチャンスは巡ってこない。そういうチャンスをとらえて、大いなる可能性を与えられた合併だと思って、チャレンジしていきたいですね。正しい合併のモデルを実証していくということで、すごいものだなあと思っています。合併しても、足助というところがなくなるわけではありません。その思想、考え方はこれからも打ち出していきたいし、都市と山村がきちんとした役割をどうつなげていくかが鍵になるかと思っています。

9. これからも、足助らしいまちづくり

最近うれしいことは、「中馬のおひなさん」というイベントが民間の発想から出てきたことです。町の中の衆が何か危機感を感じて、こんな試みが出て今年で7回目。約一カ月間のイベントですが、昨年は延べ7万6千人の方が来ました。今年も今、みんなワクワク準備をしています。2月11日から3月5日までです。来られていない方はぜひ来ていただけるとびっくりされると思います。こうした事業は継続が力になってくるので、絶対に継続していかなければならない。

行政がシャカリキになって頑張っていくのでなく、これからは行政から手を離して民間に、地域に委ねていく。地域というのはいろいろなものが絡み合いながら動いてきていますから、こんなにいいことはない。ただ大事なことは、いつまでも情報は発信し続けなければいけないということです。足助は新聞に記事をたくさん載せていただいていますし、テレビ放映もよくしていただきます。視察も日に1件はある町です。特にテレビ放送は頼むわけじゃないですが、何かありませんかと向こうからいってくる。そういう意味では、情報発信力は持っていると思っています。

もう一つは、木村尚三郎先生の本にも「女老外のまちづくりをやれ」と書かれていますが、そういう多彩な集まりの中で新しいまちづくりが出てくるということです。足助の町の中で保守的にならず、足助の領域を乗り越えて、新しい6市町村のパワーを得る。足助にない小原のいいところを取り入れる。また小原が足助を見ながら頑張っていく。市域の中でがんばれる仕組みが、これででき上がります。今までは、小原村、足助町という考え方で来ましたが、これからは違います。そんな実験が4月1日からいよいよ始まります。皆さん、期待をして見ていただくと面白いなと思っています。

いずれにしましても、これからまだまだ正念場です。合併を見据えて、うちも三州足助屋敷と百年草、観光協会が株式会社を作りました。三州足助屋敷も今までは行政がめんどうをみて直営でやっていますが、豊田市の中に入ってしまうと、どこで管轄してやっていくかわからなくなってしまうので、早いとこ独立して動かそうということで、4月1日から立ち上げました。合併を前提に、足助の良いものはそのままでいくという基盤を作っております。足助のよさは、これからも活かされていきます。また古い町並みも従来どおり展開されていくと思っています。

これからの時代は少子高齢化がますます進

んでいきます。うちの町も、年間に生まれてくる赤ちゃんが 40 人、亡くなられる方が 120 前後。昭和 20 年代に 1 万 7 千人弱あった人口が、今 9 千 8 百人を少し割っています。今住んでいる人たちが、頑張らなきゃいかんということで、先ほども申し上げた元気老人がどんどん前へ進んでいけるようなことをやっていきたいですね。若い人がいないという嘆き節は、もうこれからはいらないと思うんです。出て行く人は出て行く理由がちゃんとありますから気持ちよく送り出して、残った人たちで頑張りなさいということで、年寄りを大事にしていくことをやっていきます。いい受け皿を地域に作って、みなさんが足助に来て、「ようし！これから田んぼでもやってみるか」と元気になっていただけると、ますます日本の国土は繁栄していくんじゃないかなと思っております。